ロシアの作家とチェチェン

── A・A・マルリンスキーの作品（デカブリスト蜂起以後）──

藤沼　貴

私はこの紀要の第9号（1999年）に「ロシアの作家とチェチェン──A・S・グリボエードフの場合──」，第11号（2001）に「ロシアの作家とチェチェン──A・A・マルリンスキー（ベストゥージェフ）の生活──」，第13号（2003）に「ロシアの作家とチェチェン──A・A・マルリンスキーの作品（デカブリスト蜂起以前）──」を掲載した。その三回の掲載の際に繰り返し述べたように，これらの小論は『ロシア作家とチェチェン』をテーマとする包括的な論考の小部分の準備的な素描であった。

今回の小論も同じ性格のものであり，前々回，前回と併せて三編で，「ロシアの作家とチェチェン──A・A・マルリンスキーの場合──」と題すべき部分を構成するものの準備的素描である。

前三回と同じ釈明をすることになるが，この小論も少数の資料をもとに，短期間に書かれたもので，到底学術論文とは言えないが，今後の仕事の担保として，あえて公表することにした。

1　文学活動の断絶

第13号掲載の小論で書いたように，マルリンスキーの文学的創作活動は1825年のデカブリストのクーデタ失敗を境にして，二つの時期に分けられる。（1825年までの時期を二つに分けている研究者もいるが、[1]その区分が妥当か

どうかを判断するのは容易ではないので，この小論ではそこまで踏みこまないことにする)。1825年を境に人生が一変したのはマルリンスキーだけに特殊なことではなかった。デカブリスト運動にある程度加わった作家・詩人はすべて，その蜂起失敗後，生活全体の激変を体験し，創作活動も大きく変化した。K・F・ルイレーエフはデカブリスト運動の首謀者の一人として逮捕され，1826年には死刑に処せられたので，その文学的活動は変化どころではなく，断絶してしまった。かれの文学活動は1825年までの数年間だけなのである。V・K・キュヘルベッケルの場合は，終身流刑になり，1825年以降は罪人として自らの悲運を嘆く詩人となった。

マルリンスキーの場合も，1825年12月の事件によって，貴族の身分と生活，前途洋々とした軍隊での出世コース，社交界の人気者という快適な立場，人気作家の地位など，あまりにも多くのものを一挙に失った。その喪失は多くのデカブリストの場合と同じように，単に恵まれた生活と名声を失ったというより以上に深刻なものだった。それは，かれらの多くがデカブリスト運動に参加していたのは，政治活動としてより，むしろ理想実現のためであり，それはかれらの精神や感情に深くかかわっていた。作家・詩人の場合は，その創作活動とデカブリスト運動は一体をなしていた。マルリンスキーの場合はとくにその傾向が強かった。

マルリンスキーはデカブリスト運動の中心人物の一人であり，その思想宣伝の筆頭とみなされる立場を占めており，首謀者として処刑されたルイレーエフの盟友でもあった。しかも，蜂起当日多くのデカブリストたちが動揺逡巡している中で，決然と実行行為を指揮し，その中心となったモスクワ連隊を弟ミハイル・ベストゥージェフらと共に率いて，蜂起現場の元老院広場に向かった。未遂に終わりかけた蜂起がかろうじて成立したのは，ベストゥージェフ兄弟など少数の将校の勇気によるものだった。しかし，マルリンスキーには政治思想と呼べるほどのものはほとんどなく，自分のしていることが

国家と皇帝に反逆する暴力行為だという認識が薄かった。自分の行為は自らも誇り，他人も賞賛すべき崇高な精神の発現だと信じ，熱に浮かされたように行動していたのである。それは実に純粋，あるいは，幼稚であった。マルリンスキーは失敗した場合の隠れ家も逃げ道も準備していなかったので，皇帝側の軍隊が発砲すると，たちまち広場から逃げ出し，酷寒のペテルブルグの町を一晩中さまよい歩いたあげく，あっさり自首して罪に服した。

レーニン，毛沢東，ガンジーなどの例を挙げるまでもなく，職業的政治家なら一度や二度の失敗で屈することはない。かれらは教条主義的だったり，狂信的だったりしたが，同時に非情で変転きわまりない政治や革命の現実を熟知しており，あらゆる変化に瞬時に対応できるプラグマティストでもあった。それに引き換え，マルリンスキーばかりでなく，多くのデカブリストたちの「革命」運動は理念に支えられた精神活動が主だったので，失敗に対応する術を知らず，一回の失敗がすべてを挫折させる破滅的な衝撃となった。それは，美しい夢を見ていた者が，頭をたたかれて目をさました時，夢の世界が一瞬にして消え，呆然と周囲を見まわすのに似ていた。

1825 年までのマルリンスキーの文学活動はこのようなデカブリスト運動と表裏一体をなす精神的活動だった。そのため，デカブリスト運動が国家反逆の大罪だと気づいた時，マルリンスキーの文学活動は同時に崩壊した。犯罪者として断罪されたあと，牢獄で文筆活動を続けた文人の例は多い。しかし，マルリンスキーの場合は，デカブリスト運動の失敗はそれと重ね合わされていた文学活動が「いったい何だったのか，どのような意味を持っていたのか」という問いを生じさせ，さらに「これから自分は詩人・作家として仕事ができるのか。できるとすれば，その仕事はどのようなものになるべきか」という問いにつながった。

マルリンスキーは蜂起翌日に自首して逮捕され，ペトロ・パヴロ要塞監獄に収監された。取調べの結果，死刑を宣告されたが，死一等を減じられて二

十年の懲役刑に処せられた。しかし，かれが実際に懲役（強制労働）に服したことはなかった。かれは宣伝活動と実行行為の両方の中心者の一人であり，かれ自身が手を下して殺傷をしなかったとはいえ，暴力行為の現場にいたので，量刑は予想外に軽いものだった。

マルリンスキーは1826年8月から1827年10月まではフィンランドのスワーラ要塞に禁固され，1827年12月から1829年7月まではヤクーツクの流刑地ですごし，1828年8月からはカフカースの軍隊で一兵卒として勤務した。（前記のように，この三か所でのマルリンスキーの状態は禁固，流刑，軍隊勤務であり，懲役よりゆるやかだった。また，この記述に時間的空白があるのは移動に費やした期間である）。かれはスワーラでは文筆活動をしていなかったようであり，ヤクーツクでも多少の詩を書き，韻文小説「ペレヤスラーヴリ公アンドレイ」の最初の二章といくつかの断片だけを書いて，中断するにとどまった。本格的な創作活動を再開したのは1830年半ばのことだった。劣悪な生活環境の中で，文学どころではなかったに違いないが，この五年以上の歳月は，かれがこれまでの自分の生活を反省し，これからの生き方を考えるのに使われた時間とみなしてよいであろう。

2　1825年までの文学活動

本紀要第13号掲載の拙論で述べたように，マルリンスキーが詩を発表しはじめたのは1817年，かれが20歳の時だったが，その作家としての名声と人気が高まったのは1821年に散文を書きはじめ，さらに評論にも活動範囲を広げてからであった。それから数年して，1825年の時点では，かれは当時第一の評論家，人気作家となっていた。その活動は評論と散文小説に二大別され，散文小説はさらに歴史小説と現代小説に分けられる。

マルリンスキーの批評活動は1819年にすでにはじまり，1822年までに三十以上の論文を雑誌に発表した。しかし，かれの批評が高い評価を得たのは，

N・I・グレーチの著書「試作ロシア文学略史」をめぐる論争に参加した1822年のことであり，アリマナフ「北極星」掲載の「新旧ロシア文学概観」(1823)，「1823年ロシア文学概観」(1824)，「1824年と1825年初頭のロシア文学概観」(1825) によって，批評界での第一人者の地位が確立した。

前回の拙論で書いたように，マルリンスキーの批評の最大の価値は，該博な知識と的確な分析によって，かつてなかったロシア文学の通時的・共時的全体像を読者に提供したことであった。かれの批評家としての視点や思想的色彩はこの大きな利点の陰にかくれて，とくに意識されないほどだが，あえてそれを指摘すれば次のようなものであった。

1．ロシア文学を単に芸術の一分野としてではなく，ロシア人の精神活動，思想全体の表現とみなし，それに高い価値を与えようとする。
2．文学に崇高なものの表現を求め，卑小なものに埋没させまいとする。
3．新しい文学，西欧文学を尊重しながら，ロシア独自の文学を要請する。

このように表面的な個条書きにすると，マルリンスキーの思想は啓蒙主義的，理性的なもので，ロマン主義の枠に入らないように思われる。たしかに，マルリンスキーは1820年代前半において，ロシアの理性を代表する秀才であり，その思想は理知的だった。しかし，その理知はあまりも観念的で，夢の領域に入り，ユートピア的で，情熱的だった。しかも，それはマルリンスキー特有の個人的現象ではなく，デカブリストたちの多くに共通のものであり，よく言われる「ロシア的逆説の」一つの現れだった。ソ連時代の教科書的説明によれば，19世紀初めのロシアのロマン主義には，社会的意識をもったデカブリスト的な「積極的ロマン主義」と，ジュコフスキー的な内面に入りこむ「消極的ロマン主義」があったという。これはあまりにも単純化された図式で，複雑な現実に相応していないし，「積極的，あるいは消極的ロマン主義」という用語にも問題がある（まして，{革命的，あるいは保守的ロマン

主義」という用語は行き過ぎであろう)。しかし，マルリンスキーを含めて一般にデカブリストたちの姿勢を「デカブリスト的ロマン主義」と呼ぶことは可能だし，むしろ妥当であろう。

マルリンスキーを筆頭に，デカブリストたちの多くの中では，このような「ロマン主義」につらぬかれた社会的・政治的なものとしてのデカブリスト運動と文学的創作などの精神的営為が表裏一体になっていた。そのため，しばしば，デカブリストたちの文学活動は政治的思想や信念の表現だと説明されてきたが，前二回の拙論でも述べたように，マルリンスキーには「政治的」と呼べる思想や信念はない。かれが農奴制を悪として否定していたことは事実だが，それは当時の多くの貴族知識人の常識であり，モラルにすぎなかった。デカブリスト運動の場合，政治と文学の脈絡は，極度に単純化して言えば，「政治→文学」ではなく，逆に「文学→政治」であった。デカブリスト運動の首謀者として死刑になったために，政治的指導者とみなされているルイレーエフの場合でもそうであった。マルリンスキー自身が，逮捕後の取調べの際にルイレーエフについて，官憲に次のように説明している。「もっとも熱心な結社のメンバーの一人で，想像の中に浸りきっていました。かれは，人間が自分のためでなく，隣人の利益のために活動し，自分の行為の正しさを確信しているならば，それはつまり，摂理に導かれているということなのだ，と信じていたのです」。[2] デカブリストたちは自らを「選ばれた人間としての詩人」とみなしており，代表的デカブリストの一人キュヘリベッケルはその詩人像を「人類を一新し蘇生させる神のごとき力の壊れやすい器」[3] と表現していた。

マルリンスキーの文芸作品は 1825 年の前後を通じて，散文小説が主要素をなしている。

1825 年以前の時期では，その作品は歴史小説，現代小説二つのジャンルにまたがっており，量的には３：１で歴史小説のほうが多かった。

周知のように，ロシアの歴史小説はカラムジンの『貴族の娘ナターリア』と『太守の妻マルファ』によって本質的に新しいものになり，プーシキン，トルストイから現代へいたる歴史小説につながるものとなった。それまでのロシアの歴史「小説」は，ただ人物の名前や表面的な事件を歴史から借りただけの物語で，歴史との深いかかわりはなかった。カラムジンがはじめて歴史の中に何らかの「真実」，あるいはリアリティを発見し，それを表現しようとした。カラムジンの場合は，ロシア人の感じやすい善良なハートの中に，ロシアの歴史をつらぬく軸があると考えた。マルリンスキーの場合は，歴史の中に何らかの「真実」を発見しようとした点ではカラムジンに倣っていたが，カラムジンとは違って，個人の心情ではなく，歴史それ自体の中に何かを発見しようとした。しかも，それはハート，まして「涙もろさ」といったものであってはならず，崇高なもの，ヒロイックなものでなければならなかった。

現代小説の分野では，マルリンスキーは基本的に新しい文学の流れに沿いながら，カラムジンとは一線を画し，個人の心情や日常的生活の細部に関心をしめさなかったばかりか，意識的にそれを拒否した。かれは凡人の日常の生き方をとり上げたが，それはその中にヒロイズムを発見するためであり，運命の力などのような，人間を超えたものとの関わりを見るためであった。

3　1825年以後の文学活動

①　文学活動の再開

前述のように，1825年12月14日のデカブリストのクーデタ失敗によって，マルリンスキーの生活は一変し，文学活動も崩壊した。

1825年12月から翌年8月までのペトロ・パヴロ要塞監獄収監中と，その後1827年10月までのフィンランド，スワーラ要塞禁固中には，文筆活動はおこなわれなかったと考えられる。1827年12月ヤクーツクの流刑地に移っ

てから，細々ながら創作が再開された。しかし，すでに指摘したように，1829年7月までの1年半の流刑生活の間に書かれたのは，多少の詩と韻文小説「ペレヤスラーヴリ公アンドレイ」の最初の二章といくつかの断片だけであった。

ヤクーツクの流刑地は人口約2500，家屋数は283（そのうち石造は2軒だけ）という寒村で、[4] せっかく復活しかけた創作意欲も盛り上がりにくかったことは想像できる。かれがカフカースの軍隊への編入を皇帝に直訴したのは，もう少しましな生活環境に移りたいという気持ちや戦闘に参加して勲功をあげ，国家反逆者の汚名をそそぎたいという希望もあったが，創作意欲の高まる場所に身をおきたいという考えもあった。かれはまだヤクーツクにいた時に，弟のミハイルに手紙で「おまえはカフカースを見ながら，詩人にならなかったのか。それほど天の近くにいながら詩人にならないのは無礼なことだとぼくには思える」[5] と書いたほどだった。

1828年8月から，マルリンスキーはカフカースの軍隊で一兵卒として勤務しはじめた。しかし，カフカースの現実はマルリンスキーが想像したよりはるかに過酷で，創作活動も容易に進まなかった。とくにデルベント要塞での生活は無味乾燥だった。1830年5月15日付のF・V・ブルガーリンあての手紙で，マルリンスキーは「カフカースは詩人とロマンティストのための対象に富んでいますが，運悪く，ここは花も悪臭を発し，ブドウは黄熱病を滴らせています」[6] と書いたほどだった。このような情況の中で，かれが持続的に作品を発表するようになったのは，ようやく1830年に恋愛アヴァンチュール小説『試練』を書いて，ペテルブルグのグレーチのもとへ送ってからのことだった。それ以後書かれた作品の主なものを発表年代順に列記すれば，次のようになる。

1830年　『試練』，『エルマン先生への手紙』

1831年　『おそろしい占い』，『ベロゾール中尉』

1832年　『戦艦ナデージダ』，『襲撃』，『アマラト・ベク』，『甲冑兵』

1834年　『山民の捕虜になった士官の話』，『水夫ニキーチン』
未完　『ムッラ・ヌル』
不明　『赤い覆い』，『骨董趣味の軍人』，『時計と鏡』，『シベリア物語断章』，『フセイン王』

これらの作品を内容別に並べかえると，次のようになる。

1恋愛アヴァンチュール	『試練』
2ヒロイックなアヴァンチュール	『ベロゾール中尉』，『戦艦ナデージダ』，『水夫ニキーチン』
3運命の力	『おそろしい占い』，『時計と鏡』
4歴史	『襲撃』，『甲冑兵』
5ルポルタージュ	『エルマン先生への手紙』，『シベリア物語断章』，『フセイン王』
6カフカース問題	『アマラト・ベク』，『ムッラ・ヌル』，『赤い覆い』，『骨董趣味の軍人』，『山民の捕虜になった士官の話』

②人気作家としての復活の成功

前掲の一覧を見るだけでも容易に推察できるように，マルリンスキーは1830年から34年の間に，恋愛やヒロイックな物語を軸にして，波乱万丈の事件が次々におこるアヴァンチュール的な作品を書き，たちまち人気作家になった。この時期の作品ははじめA·Mという頭文字だけの署名で発表され，のちにマルリンスキーという筆名が使われるようになった。四人ものデカブリスト（つまり，反逆者）を出した家名を使うのを避けたかったのであろう。当時の文学界や読者層は現代とは比較にならない狭いものだったから，読者はマルリンスキーがベストゥージェフであることは知っていたに違いない。しかし，かれの作品の人気はそういうことに関係がなかった。

この時期のマルリンスキーの人気は「今では想像するのも困難なほど大きなものだった」。かれの作品が作者の名前をつけずに『ロシア中・短編小説集』という題名で出版され，それが書店の「棚から，湿った砂糖のように消えてなくなった」。[7] マルリンスキーの仕事を真の文学ではないと酷評したベリンスキーでさえ，かれを「散文のプーシキン」と呼び，1834年の時点で「マルリンスキーの前にすべてが跪いている」[8] と認めたほどだった。それからほとんど40年もたった1870年にI・S・ツルゲーネフは次のように書いた。マルリンスキーの名声は「30年代にはだれも及ばないほどとどろきわたっていた。プーシキンでさえ，当時の若者たちの考えからすれば，比べものにならなかった」[9]

このような大成功はもちろん偶然ではない。1820年代末から1830年代にかけて，ロシアでも散文小説にたいする強い欲求が生じた。その傾向をマルリンスキー自身は次のように受け止めていた。「詩はみんなが書くようになって，だれも耳をかたむけなくなってしまった。ちらほら聞こえていた不満が流れ集まって，とうとう一まとまりの叫び声になった。《散文をくれ，散文を！――水をくれ，ただの水だ！》」。[10] マルリンスキーの小説もこの流れの中にあった。

1828年，プーシキンは同じ現象にたいして次のような解釈をしめした。「人の心が同じ型の芸術作品，作りものの選びとられた言葉の狭い枠に飽き，新鮮な大衆的な創造，はじめは軽蔑されていた変な俗語に関心をむける時代が，成熟した文学の中で進行しつつある」。[11] マルリンスキーは俗語を使おうとせず，「詩的散文」の枠を守った。だが品格のある文体を読者はよろこんで受け入れた。その後のロシア文学の言葉の流れを見ると，結局マルリンスキーとプーシキンの中間のところに落ち着いており，マルリンスキーの文体が保守的だったとは言えない。

散文への傾斜は文体だけでなく，作品の内容にもかかわっていた。ゴーゴ

リはそれをロマン主義の一種と解釈し「われわれの社会に近づこうとする希求」[12]と理解した。そして，作家の役割を次のように理解した。「対象が日常的なものになればなるほど，詩人はその中から非日常的なものを引き出すために，そして，その非日常的なものが完全な真実にもなるために，ますます高い位置に立たなければならない」。[13] マルリンスキーはゴーゴリのようにあまりにも卑小な日常的世態に入りもうとしなかったが，日常的人物のなかに非日常的な崇高さを捕らえようとし，それに成功した。つまり，マルリンスキーは散文優勢という一般的傾向の先端に立ちながら，それに迎合することなく，1825年以前からの自分の「ロマン主義」をはっきりつらぬいたように思われる。

このように見ると，復活したマルリンスキーの文学活動は禁固，流刑を経たのち，一兵卒として戦闘に参加するという苦境に耐えていたかれに，すばらしい活動の場と名声を与えたばかりか，反逆者としての汚名をすすいだでくれたように思える。それに加えて，この頃かれはロマン主義を喧伝していた雑誌「モスクワ電信」で，ロシア文学の中でついにロマン主義が勝利したことを宣言し，「現代の詩人はロマンティストにならないわけにはいかない」[14]と誇らしげに言いきった。それは得意の絶頂にある者の言葉に聞こえる。しかし，実情はまったく違っていた。

③作家としての新生の失敗

本紀要11号ですでに書いたように，1831年12月16日（デカブリスト蜂起の記念日の翌々日）かれは手紙でこう書いた。「作品の中で私はよみがえります。……たしかにその時私は別の生を生きています。軽やかな私の想像力はあらゆる形をとります。……私は紙の上で笑ったり泣いたりします。……しかし，それは一瞬で……私はまもなく冷えてしまいます。言葉が私には実にまだるっこく，その上読者は実に遠くにいて，そのハートに近づく道は心

の中でも，実質的にも実にたよりなく思えるのです」。[15] その一年後の 1832 年 12 月 14 日，まさにデカブリスト事件のあった日に，マルリンスキーはこんな深刻な言葉を書いていた。「きょうは私の命日だ。沈黙と悲しみの中で私は自分の魂の追善供養をおこなう」[16]

常識的には目ざましいものに思える成功のかげに，これほどの挫折感と自己嫌悪がひそんでいたことは容易には理解できないが，その最大の原因は，マルリンスキーがデカブリスト運動の時に持っていて，その失敗によって悔悟反省した後にも，変わることのなかったかれのロマン主義にあったのであろう。かれは「ロマン主義について」と題する短い論文の中で，自分の「ロマン主義」の解釈を提示しているが，それをごく短く要約すれば次のようになる。[17]

＊人間は感性，理性，意志によって生きており，その融合が「思想」である。

感性は実現された思想，理性は思想の体験，意志は事象に転化する思想である。

それ故，思想を付与された存在は感じ，認識し，行動することを欲する。

＊認識には二つの方法がある。

一つは経験によるもので，限定的であり，事物がどのようなものであるか，どうあるべきかを見る。

もう一つは想像力によるもので，無限定であり，事物がどのようなものであり得るかを考える。想像力，あるいは，思想と言うべきものは，感覚に依存せず，無限である。

＊行為は顕現された意志であり，その本質は善である。自分および全体の幸福のためでなければ，行為は生じない。

＊観察の目的は真，行為の核心は善であり，両者の融合が美，または，詩である。

詩は自然を包含するが，それを模倣するのではない。それによって自らの独自の創造精神を包むのである。

実に高邁な思想だが，このような思想が現実に存在するとは考えられない。実際，その結果はデカブリスト事件という児戯に等しいものでしかなかった。その失敗によって，マルリンスキーの革新的な政治的イデオロギーは一夜にして消滅した。しかし，この「思想」は 1825 年以後も，かれが精神的活動を再開すると，ふたたび息を吹き返した。それはまさにかれの「思想」であり，詩であり，行為だったので，政治的活動崩壊の瓦礫の中からよみがえった。しかし，それは人気作家としての復活とは同じものではなかった。かれの作家としての輝かしい復活は，かれ自身から見れば，紙の中のたわむれであり，思想でも，詩でも，行為でもなかった。児戯でしかなかったデカブリスト運動より，はるかに恥ずべきものだったのである。

それからの脱出を目指したのが，『アラマト・ベク』，『ムッラ・ヌル』をはじめとする，いわゆるカフカース物[18] であった。それはロシアの中ではすでに不可能になったマルリンスキー的「ロマン主義」の実例を，カフカースの山民のロシアにたいする抵抗の中に見ようとする破天荒のものだった。これによって，マルリンスキーはただ人気作家として復活するのではなく，思想する存在として，復活しようとしたのである。

デカブリスト蜂起にもまさるとも劣らぬこの「革新的」行為は十分に実らぬまま，1837 年 6 月のかれの「戦死」によって終わった。その戦死が実は山民側への逃亡だったという説が生まれたが，それは死の前後の事情が謎めいていたからだけではない。かれの「思想」のコンテキストが山民の中でのロマン主義の実現という解釈を可能にしているからでもある。

注

1. *Мордовченко Н.И.* // А.А. Бестужев-Марлинский. Полное собрание стихотворений. Библиотека поэта. Большая серия. 2-е издание. Л., 1961. С.5
2. Там же. С.25
3. Там же.
4. *Попов А.В.* Русские писатели на Кавказе. А.А. Бестужев-Марлинский. Вып.2.Баку, 1949. С.4
5. *Котляревский Н.А.* Декабристы. СПб.1917, С.155
6. *Голубов С.* Бестужев-Марлинский. М., 1938, С.305
7. *Мордовченко.* С.41-51
8. *Белинский В.Г.* Полное собрание сочинений. М., 1954 Т.1, С.83
9. *Тургенев И.С.* Полное собрание сочинений. М.,1965. Т.X, С.266
10. *Маслин Н.Н.* А.А.Бестужев-Марлинский//А.А. Бестужев-Марлинский. Сочинения в двух томах. М.,1958. Т.1, С.38
11. *Пушкин А.С.* Полное собрание сочинений. Т.7, С.80-81
12. *Гоголь Н.В.* Полное собрание сочинений. М.-Л., 1952, С.54
13. Там же. С.553-554
14. *Бестужев-Марлинский А.А.* Сочинения в двух томах. М., 1958. Т.2, С.594
15. *Голубов.* С.320
16. Там же. С.321
17. Литературно-критические работы декабристов. М., 1978. С.79-82
18. *Бестужев А.А.* Кавказкие повести. Литературные памятнцкц. СПб., 1995